総持学園創立80周年・鶴見大学仏教文化研究所設立10周年記念シンポジウム

『瑩山禅と曹洞宗史』～新たなアプローチを目指して～

挨　拶

仏教文化研究所所長　髙﨑　直道

本日は皆様方それぞれお忙しいところ、鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム『瑩山禅と曹洞宗史～新たなアプローチをめざして～』にご参集いただきまして誠にありがとうございます。

本日のシンポジウムは研究所にとりまして非常に重要な課題をそれぞれ専門の先生に論じていただこうということでございます。研究所にとりましては大変大事な機会であり、これからの研究の方向を決める大変重要な場であるというふうに思っております。ご存知と思いますが、本学鶴見大学はその母体、学校法人総持学園が創立して以来、今年が80周年ということでございます。また、仏教文化研究所は10周年ということで、これまでの研究成果を踏まえながら新しい方向に踏み出そうとしているところであります。

私は、仏教学が専門でございますけれども、特に曹洞宗、曹洞禅の問題、あるいは總持寺の歴史の問題ということに関しましては専門ではございません。ですから、史料の扱いなどにつきましては先生方からご教示を得て、ようやく論文を仕上げることができるというような状況でございます。そこで本日のご専門の先生方の研究発表を非常に楽しみにしているところでございます。お聞きするところによりますと、最近、古い史料が新しく発見された

ということで、これまで知られてきた以外に更に總持寺の歴史を検討することができるようになったということであります。

またこれも皆様ご存知のことと思いまが、曹洞宗と申しますのは，現在、永平寺の開山道元禅師を高祖、總持寺の開山瑩山禅師を太祖として両師を両祖として崇めるという体制をとっております。名前のとおり、開祖である道元禅師は、高く深い教えを唱えられた。しかしそれを敷衍し、日本全国に広めたその最大の功績は瑩山禅師であるというのが、私どもがもっております常識でございます。そのことが禅師号の高祖と太祖、つまり高い親と太くした親ということでございましょう。そういう意味をこめて私どもは瑩山禅師を太祖とお呼びしています。

總持寺の動向というのは室町から戦国にかけて、そして更に江戸に入ってからも曹洞宗の趨勢というものを決める非常に大きな力になった。これは常識的に語られることであります。そして、それを裏付けるような史料の研究を今日は発表していただけると思いますので、楽しみにしております。

そのあと、先生方によりましてシンポジウムという形で我々の質問を受けてくださるということですので、少し長い時間でございますが、皆様と共にシンポジウムを盛り上げていくことにつとめたいと思う次第でございます。

それでは四名の先生方のご講演を拝聴するところからこの会を始めたいと思います。ご清聴よろしくお願い申し上げます。